

萩原朔太郎記念
水と緑と詩のまち

前橋文学館報

No.3 1996.3



「眠る男」と朔太郎

先日、映画「眠る男」を岩波ホールで観た。これは群馬県の人口が二〇〇万人を突破したことを記念する事業として企画され、同県出身の小栗康平が監督している。すでにご覧のむきも多いだろうが、これがじつに胸に沁みる美しい映画に仕上がっている。

あれはいつたい群馬のどこだろう。山あいの河にそつて「一筋町」がある。この町の古い農家に一人の男が眠り続けている。男は外国を彷徨した後にこの町へ戻るが、あるとき山で事故にあい意識を失つたのだ。カメラはこの横臥するだけの一人の「眠る男」を中心において、その周辺で営まれる人々のつましい日常生活をたんたんと映し出していく。そこに山があり、森があり、河があり、季節は静かにめぐる。なんとそれだけの映画であるのだが、それがなんとも心動かされるのだ。

ついにひとことも発することなくただもう眠るのみにしていつか息をひきとつてゐる男。およそ主人公にふさわしからぬかれを主人公にした。ここにこそ

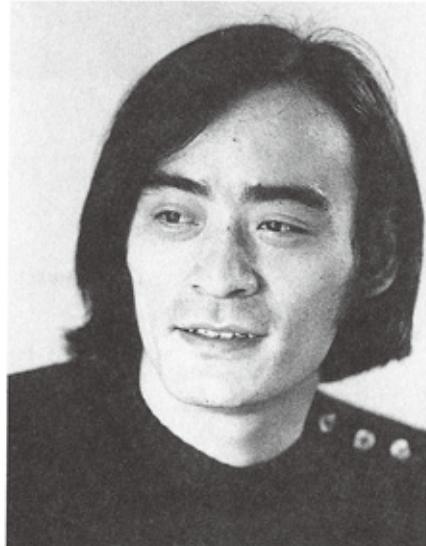
の監督の非凡さがあり、またこの映画の成功があろう。ところでいつたいその着想はどこからえたのか。わたしはこのことに関わつておもいたすのである。ひょつとしてそれは朔太郎からではないかと。

そのゆえんは映画の一シーンにある。ご覧になつたかたは憶えておいでだろう。ここでは高校の演劇部の生徒たちが重要な役割を演じている。物語のなかほど、ある夜、前橋市(?)のシャツターレを下ろしたアーケードの繁華街、練習帰りのかれらが詩を朗唱しあう。いやその詩がそうあの朔太郎の「猫」なのだ。

まづくろけの猫が二疋、
なやましいよるの屋根のうへで、
びんとたてた尻尾のさきから、

糸のやうなみかづきがかすんでゐる。

「おわあ、こんばんは」
「おわあ、こんばんは」



正津 勉

●しようづ べん

1945(昭20)年福井県大野市生まれ。同志社大学文学部社会学科卒業。

1972年に第一詩集『惨事』を上梓。以後、詩作活動に専念。1980~81年には渡米しアイオワ大学・オークランド大学の客員詩人となる。ほかにオーストラリア、メキシコなどで講演・朗誦を行う。

詩集に昨年秋に刊行の『笑う男』ほか、共同詩集・散文集など多数。

昨年末に前橋文学館において第4回文学館講座「詩の味方一詩の読みかた 詩の書きかたー」を担当、好評のうちに終了した。

「おぎやあ、おぎやあ、おぎやあ、
「おわああ、ここ家の主人は病氣です」

屋根の上でなやましく鳴きかわす恋猫たち。屋根の下でしんと臥している病氣の主人。そしてそれらの高くなる糸のような三日月。どのようなものか、

ここに「眠る男」を重ねたら、ちがうだろうか。それはさて、わたしなどはこれを小栗康平が郷土の大詩人にした挨拶のシーンとみるのだが、いかがなものか。

「眠る男」拓次の夢のなかではきっと朔太郎が生きているのである。